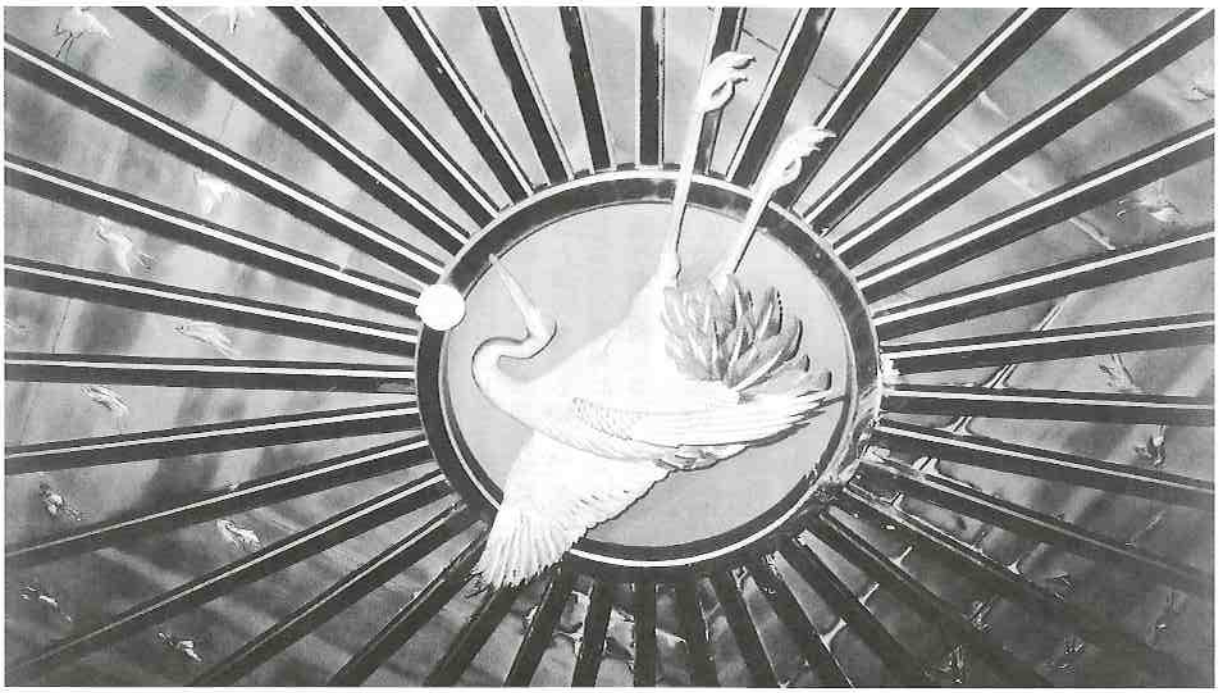
かも市史だより

平成17年3月
No.11

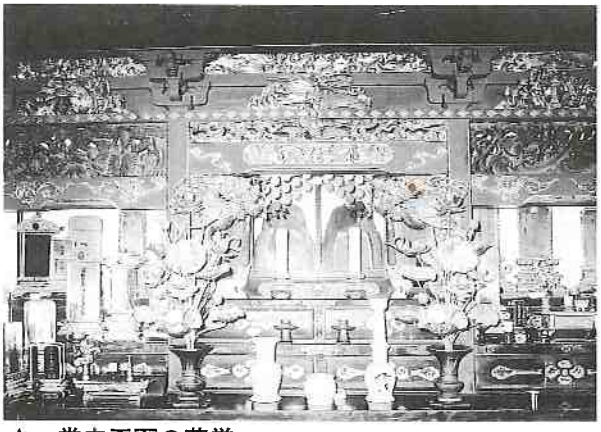
■編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

定光寺の伽藍、そしてまちづくり



▲　定光寺開山堂の天井装飾

▲　開山堂外観



▲　堂内正面の荘厳

加茂川河畔に威風堂々と建つこの寺は、慶応二年（一八六六）に焼失ののち明治十六年（一八八三）に再建され、大正十二年（一九二三）には鐘楼門が竣工しました。境内の環境はよく整い、本堂内に掲げられた境内の鳥瞰絵（昭和十四年製作）に描かれた様相を今もよく伝えています。

建物の構造は豪快で完成度も高く、堂内には極彩色が施されています。特に開山堂内の荘厳には目を見張るものがあります。建築史の観点からみて、この伽藍は近代の寺院建築のあり方を存分に備えた貴重な事例であるといえます。私は現在寺院・神社建築の調査を進めていますが、今後町屋・農家・近代化遺産と調査対象を拡げるにつれて、また成果もあがると思われます。

ところで、これらの成果は市史編さん事業のみに留まるものではありません。具体的には指定・登録文化財へ、または都市及び農村景観の保全や道路計画・防災・観光、それに学校・社会教育への基礎資料となりうるものであり、結果として地域の個性となる加茂市の宝物探しにつながります。市民の皆様のより一層のご協力をお願いします。

（文化財部会　山崎完一）

幕府領上条村庄屋の新発田藩主への御目見

今から一九〇年前の文化十二年（一八一五）、幕府領上条村庄屋中澤太郎兵衛が、旧領主である新発田藩主に御目見をしました。庄屋の残した記録から殿様への御礼、御目見の様子を眺めてみます。

御目見（おめみえ）

江戸時代、大名などが将軍に、藩士が大名に、庄屋などが藩主に、儀礼上の御礼に拝謁することを御目見といっていました。新発田藩では、藩主の帰国の時や慶事に行われました。その形態は単独で拝謁できる「独御礼」と、数人で拝謁する「惣御礼」があります。家格や由緒、藩に尽した功績により庄屋や名主・商人などに与えられました。

上条の中澤家

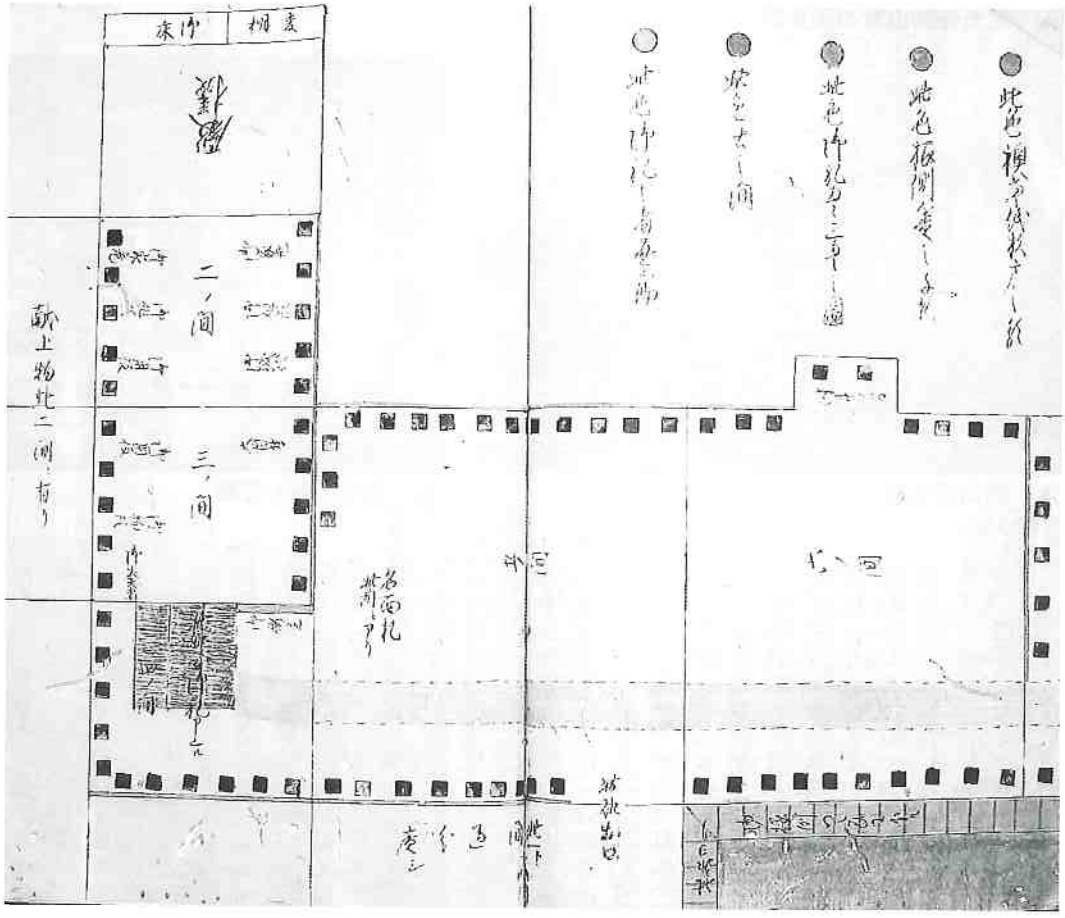
上条村庄屋中澤家の場合、太郎兵衛より二代前の、まだ中澤家が加茂町の有力町人であった正徳元年（一七一一）に、幕府巡見使などの宿泊御用を勤めたことで、当主太郎左衛門が初めて五代藩主に独御礼の御目見をしています。今回の話の主人公、上条村庄屋として二代目の中澤太郎兵衛も、同村が幕府領に上知となることが決まっていた、寛政二年（一七九〇）二月に、新発田藩から一代限りの独御礼の格が与えられました。

文化十二年の御目見

これは新発田藩領加茂組大庄屋明田川仁右衛門から案内の書状が届いたことから始まります。すなわち六月二十六日、藩主が九月に新発田へ帰城するので、独御礼の太郎兵衛や、同じ格の幕府領狭口村庄屋新右衛門宛てに、登城するか、不参か、返答するようにとの問合せがありました。太郎兵衛は翌日、早速「冥加として新発田へ罷り登る」旨を返答しています。この時の藩主は、十代藩主の溝口伯耆守直諒で十七歳でした。幕府から同年八月、初めて在所への帰国が許されたのです。そして九月六日、新発田に到着、翌十三年五月、江戸に参勤しています。

さて、中澤太郎兵衛の新発田登りは、藩主へ献上する御礼銀や離村届けなどの準備から始まっています。

▼ 中沢太郎兵衛の「御礼登日記」（表紙）

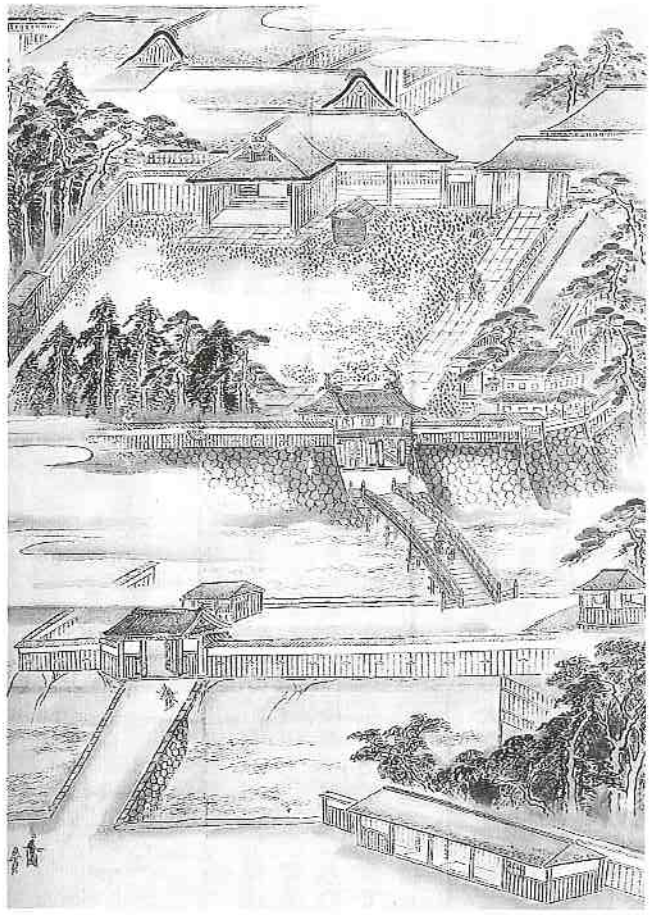


▶ 新発田城内、御目見の図（右側御台所から左へ進み、四ノ間〔左下黒っぽい四角〕から二間隔てて殿様に拝謁）

御礼銀は五匁・三匁・二匁の三段階あって、大庄屋は銀五匁、独御礼は銀三匁、惣御礼は銀二匁が通例であったので、前例にならい銀三匁としました。この銀一匁とは一文銭で五〇文に相当し、三匁では一五〇文です。

御礼の日は九月十八日となったので、十四日には新発田に着いているようにとの大庄屋からの指示があり、太郎兵衛は幕府領上条村の所轄代官所である出雲崎役所へ、九月五日付けで、一時離村の届書を出しています。その内容は雲母温泉（関川村）へ持病の疝気療養のため湯治に出かけるというもので、期間は九月十三日から二十日間で、まさしく新発田御礼の予定期間そのものでありました。

九月十三日に上条村を発ち、水原町で一泊後、十四日に新発田に到着。翌十五日に、担当であった川北組大庄屋に到着届けを提出しています。折り返し十八日の明六ツ時（午前六時頃）までにお城へ詰めるようにとの指示がありました。

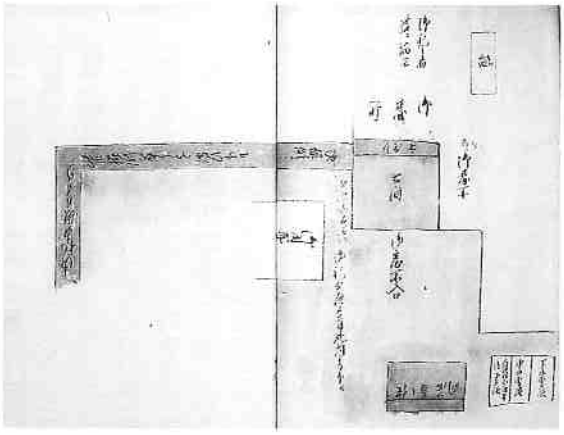


◀ **御太鼓櫓（右端中ほど、堀の外側）と御門（中央）・本丸御屋敷の様子**（新発田市教育委員会『城下町新発田四〇〇年のあゆみ』より）

御目見当日

御目見当日の十八日、太郎兵衛は寅の上刻（朝四時前）に起床し、寅の中刻（四時頃）、年番大庄屋の宿所に集まり、次いでお城の御門近くの「御太鼓櫓」脇に集まりました。そこには領内はもとより、近年幕府領となった村の庄屋を含めた大勢の者が集まっており、折悪しくも卯の上刻（六時前）から雨が降り出して、御門近くの庇で凌いでいました。やがて御門が開き、直ぐに御台所へ入ります。そして卯の下刻（七時前）から御礼の稽古が始まり、それが済むと家老をはじめ重臣たちの着座があって、藩主の出座です。

この日は新発田の町役人や町人、領内の大庄屋・名主などが御目見する日で、幕府領になった上知の村庄屋は一番最後に行なわれました。控えた間から四つの部屋を丁重に進み、太郎兵衛が四ノ間と書いた所で顔を伏せたまま、二つの部屋を挟んで、殿様の謁見です。奏者衆から「御上知上条村庄屋太郎兵衛」との名前の披露があり、深々と、かつ決して殿様の方を見遣るような不行儀なことはしない御礼が行われました。この日すべての御目見が済んだのは午ノ中刻（午後一時前）でした。



▶ **本丸の御屋敷の御台所に至る入口付近の図**（「御礼登日記」）

孫にも御目見格を

緊張のうちに御目見の終った太郎兵衛は、帰途、私領の殿様に会ったことなどおくびにも出さず、堂々と幕府領水原役所の長屋にも寄り、同二十三日の夕刻に帰村しています。そして帰村後しばらくたった十月四日付けで、出雲崎役所に「昨三日」に湯治療養から帰村した旨の届書を出しています。この日付は離村届けに書いた二十日間の期限内でした。

帰村後、太郎兵衛は孫の庄屋虎太郎にも今後、惣御礼ができるよう、加茂組明田川大庄屋に周旋を頼みこみ、願い通り次の年に虎太郎の惣御礼拝謁が叶えられました。

以上、幕府領上条村の新発田藩主への御目見の事例を紹介しましたが、何故、新発田藩は、旧領とは言え幕府領の庄屋を御目見の場に召し出したのでしょうか。藩の旧恩を忘れないように、ひいては上知村がいつ元通り自領に復活しても、支配できるように対処した〝儀式〟だったのでしょうか。庄屋のほかに、寺や神主も御目見を許されていました。

（近世部会　関　正平）

かも私史

私の出征体験

田中新田
泉田太加一

私が出征したのは昭和十八年十二月八日でした。徴兵検査ではお陰さまで甲種合格で、出征前夜には親戚が集まって酒盛りしました。明日戦地へ赴く人間が酩酊するわけにはいかないからどれほど飲んだわけでもありませんが、こちらは出征する兵士だから元気をださなきゃいけないし、「天に代わって不義を討つ」などと軍歌を唄ったりして賑やかなものでした。

出征当日は人々が旗を持って見送ってくれました。昭和十二年の盧溝橋事件の頃までは長旗を掲げたものなのでしょうが、私の頃には短旗でした。それから地元のお宮に集合しました。そこで、「きょうはかくも盛大に見送っていただいてありがとうございます。戦地では軍務に精励して頑張ってきます」というような文句を述べるんです。見送りの場は違いましたが、須田からはもう一人一緒に出征しました。後須田の樋口さんという人で、残念ながら戦死されました。

戦地では肉親からくる手紙を何よりも待っていました。中身はいつも同じ調子で、「なじら元気か、身体はどうか」といったものでしたが、それが嬉しかったのです。もっとも、手紙を受け取るのにも往生することがありました。まず「泉田、いい知らせがあるぞ」と大声で呼ばれます。差出人が女の名前だと、「おい、これは一体誰だ」とくるわけです。「母親です」「そんなことはないだろう。たるんでるな！」といわれたりして、とにかく根掘り葉掘り訊かれました。軍隊というのは見るもの見るものみんな男で、女の影も形もないわけで

▲ 筆者出征の場となった鵜森若宮八幡宮

満洲の兵隊さんへ

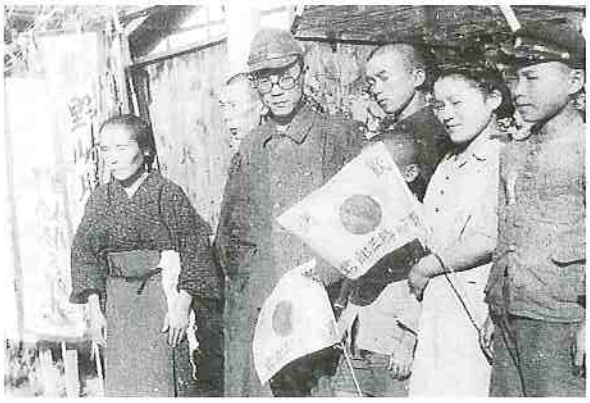
兵隊さん満洲は冬はたいさうさむい所と聞いてゐましたが今はひじやうに暑いさうですね。こちらも暑くて私どもは毎日川で水をあびてゐます。

まだ時々わるいばぞくが出てあばれるそうですが、それをよくたいぢしてお国のためにはたらいて下さる兵隊さんの事を先生やおとうさんやおかあさんから聞いてほんとうにうれしうございます。どうぞおからだを大切にして下さい。私どももべんきやうして大きくなつたら御国のためにはたらきます。

〈加茂尋常高等小学校『慰問文集第二輯』〈昭和七年〉より小学三年生女子〉

今日は十五日なので僕たち兄弟三人は朝早くお父さんにつれられて青海神社へおまへりに行きました。行く途中お父さんから今日はどういつてお宮へおまへりするかと聞かれました。僕はまんしゅうの兵隊さんがいくさで勝ようにまへりますと、いひました。お父さんは『さうだ日本の国が今に強くなるのも弱くなるのもまんしゅうに居る兵隊さんによつて、きまるのだ。』とおつしやいました。僕はお国のためにいのちをささげてゐる兵隊さんが、丈夫で働いて下さるやうに参つて来ました。

（同　小学三年生男子）



▲ **加茂町で出征者を歓送する人々**　昭和12年の様子（上）と戦争末期に近づいた昭和18年に出征者を見送る家族※

※郷土出版社『目で見る三条加茂南蒲原の100年』より

す。そんな所ですから、母親からの手紙を受け取るのも大変でした。

終戦はマニラ郊外で知りました。終戦後半年くらいは有刺鉄線を張られた中に閉じ込められていたでしょうか。それでも米軍は器量が大きかったです。日本人には米の飯を食べさせた方がいいと思ったらしく、三食米飯でした。また、「お前らは帰るんだ。父母が待っているから早く帰れ」と言いきかせる者もいて、「ああ、死刑にはならないんだ」と感じたものでした。

（大正十二年生）

天神林分校に奉職して

番田 金子敬子

▲ **旧天神林分校外観** 昭和46年3月の分校閉校後開所した天神林保育園時代のものだが、旧観をよく留めている（下条小学校所蔵）

私は昭和二十四年、下条小学校へ助教諭として奉職した。いったん退職したが、再び勤務することとなった。それは昭和二十八年十二月から二十九年三月三十一日までの冬季「天神林分校」勤務である。

十二月一日の分校開校日に、校長と肩を並べて天神林部落へ向かった。校長は分校勤務の心得を歩きながら話された。分校の建物は天神林の中ほどに架かる橋のたもとの左側にあり、その前には大勢の人達が集まっていた。子供達の中に本校で受持った児童の弟や妹の顔もあり、ひそかにホッとしたりもする。私の宿元となるお宅へも挨拶をして一日が終わった。雪が降り帰れない時は宿るようにということであった。部落全体で色々と配慮されていて、暖かい視線が感じられた。

次の日より一、二、三年生の児童が同じ教室で勉強する、三部複式授業が始まった。その頃は学校の教職員全員歩いて通勤していた。自家用車もバイクも数少なかった。歩くことは苦にならなかった。自転車は学校用の公用車だった。昭和二十八年はまだ豊かさとは程遠い時代であった。分校は教員・助手・用務員各一名で、三〇名の児童達との共同学習が雪の中で始まった。主な授業は午前で終わり子供達は帰宅するが、私がお茶を飲み、昼の弁当を食べていると、もう子供達は分校に来ている。化粧直しでもしていると、「口べんつけているっやぁー」と、いつの間にか覗き見をしている。あの頃の「ガキンチョども」、もう還暦になったかも……。

分校では子供達は私が帰るまで、私の後先になって、しゃべり、歌い、遊んでいる。トイレへ入るのも見られている。これも勤務の一部かと思った。夕方「明日もっと早く、せんせ、来いね」と、お弥彦様にかかる夕日を浴びて帰ると小さい影が並んでいつまでも手を振っている。朝は私の姿が見えると遠くから走って、カバンを持ったり、冬帽やマフラーを持ったり、お尻を押してくれる者もいる。私の足が玄関に入ると始業の鐘が鳴る。本校の鐘は軒下に下がっていたが、分校の鐘は柄のついた手振りの鐘である。時間がゆっくり流れていた分校時代、子供達へは年の離れた兄弟のようなやさしい感情がよぎる。

三月に入って展覧会そして学芸会を計画した。輪つなぎや色テープで飾った教室に図画や工作の作品を並べ、十二月からの学習の作品も飾った。学芸会の出し物は歌や踊り、子供達三〇名総出演で頑張った。「雨降りお月さん」や「みかんの咲く丘」等、父兄は勿論、校長先生も来校されるというので、みんな張り切った。お母さんやおばあさん達は着物を着て、パーマをかけている人もいた。学校の参観は、女の人が唯一オシャレのできる場所だった。

（旧姓斎藤、昭和六年生）

▲ **天神林分校1年生の児童たち**（前列左端が筆者、昭和29年3月）

医方蘭 森田千庵資料 全国に

江戸時代の後期、加茂町の蘭方医として知られた「森田千庵」に関係する資料は、生誕地の加茂市をはじめ全国に分散されて保存されている。

その所蔵先は、長谷川一夫氏の「越後の蘭方医森田千庵関係資料について」（一九九五年四月『洋学史研究』第12号）によれば、加茂の市立図書館や養徳文庫、新大医学部をはじめ全国一六か所に分散しているという。

長谷川氏の論著や私の調査結果を概略すると、森田千庵に関する資料は、もともと直系のご子孫の山吉豈氏（森田千庵の孫、親の専庵の代に山吉氏に改姓）の所蔵であったが、その後次男山吉頼奇氏が引き取り、さらにその子息卓爾氏や長女に引き継がれ保存された。しかし、次に記す千庵の研究経過などを経たりして、お二人から関係機関に寄贈され、現在に至っている。

▲ 千庵使用の印章（青山学院大学附属図書館所蔵〈写真上下とも〉）

▲ 森田千庵の父甫三から郷里の父親（千庵の祖父）仙庵に、将軍家治の逝去と田沼意次失脚のことを伝える天明6年（1786）閏10月の書簡

森田千庵について、最も早く論述されたのが、大正十二年ころに山吉氏から寄贈を受けた地元加茂の養徳文庫創始者大橋永三郎で、同十三年五月二十一日付け呉秀三博士宛ての原稿が、呉氏の『シーボルト先生3』に「森田千庵」として収録され、「シーボルト先生に従い医学蘭学を講求せしこと凡そ二年…」として、シーボルト師事・就学説のもととなっている。

さらに学術的に光をあてた人が洋学研究者の片桐一男青山学院大学名誉教授で、昭和三十五年ころから、養徳文庫や山吉氏の所蔵資料調査、続いて千庵の弟である森田円治のご子孫森田芳夫氏（栃尾）所蔵の各資料を調査された。また医学面では新潟大学医学部での蒲原宏氏の調査研究や長谷川一夫氏の洋学史の観点からの調査などがあった。

主な所蔵者とその分野は次の通り。養徳文庫＝蘭医学・蘭書・書簡等。加茂市立図書館＝書簡・雑録等。新潟大学附属図書館旭分館＝蘭医学・産書等。栃尾・和田典男氏＝蘭医書・書簡・印章等。青山学院大学附属図書館＝蘭医書・書簡・印章等。シーボルト記念館＝書簡・香典帳・俳諧書・印章等。

（文責 関 正平）

市史第一弾
加茂市史
資料編1 古代・中世
―近日刊行―
A5判 約360頁
※価格は別途お知らせします

探しています

◆ 古建築の調査に伺うと、現存するもののみならず、失われた建造物の棟梁名や建立時期を記した「棟札（むなだ）」に時として巡（めぐ）り会います。往時の加茂を考える恰好の材料となるこうした資料が、御自宅のどこかに眠っていませんか。

（民俗部会）

◀ 民家の棟札（泉田九郎氏所蔵）

編集後記

平成十一年二月の発足以来市史編さん事業も丸六年を経て、歴史・民俗・文化財といずれの分野でも次第に成果がまとまりつつある状況です。「早く読みたい」という大合唱のなか、待望の『資料編1古代・中世』の刊行も間近になりました。市民のみなさまの一層の御協力をお願い致します。

なお、市史編さん室ではみなさまからの御意見・御要望をお待ちしています。本紙の内容や企画、今後の調査・編集に活かしていきたいと思います。